

岩山の麓に座している黄金色の大仏様の前を通って階段を上る。それだけでも疲れるスリランカの5月の暑さであった。直射日光を受けて、ダンブッラ黄金寺・石窟寺院への坂道を登った。鉄の門から入口までが遠く感じた。1990年、初めて訪れた観光コースのハイライトは、石窟内に画かれた壁画群である。まだ若かったためか、さっさと足を運んだ私であったが、今では杖を用意して歩かねばならない。それほどまでして、再度訪れたいと心をひきつけるものは何なのかと、自問自答してみた。一つには、その当時の強烈な印象の絢爛壮麗な壁画画・天井画・仏像群が「ダンブッラ・マンダラ」として、私の中で膨らんだのであろう。もう一つは、その少し前に観てきた敦煌の莫高窟の仏像芸術と、ダンブッラがどうしても重なってしまう不思議な魅力であった。十分な仏教知識もない私の感性に、ダンブッラ黄金寺・石窟寺院の仏教彫刻や絵画が「声なき声の説法」として訴え、それが届いたのであろう。

### 🔥 岩山の洞窟考

ユネスコの世界遺産に認定されているダンブッラ仏教遺跡は、スリランカで最大の岩窟寺院である。荘厳な壁画も総面積およそ2300m<sup>2</sup>に及んでいる。仏像も157体だと聞いている。岩山の高さは35mあり、山の中腹、高さ180m位の位置に5つの洞窟寺院がある。この周辺には、現在も80余の洞窟があるそうだ。その為に、なだらかな岩肌の上を登って行くことになる。ダンブッラの歴史を紐解くと、紀元前1世紀まで遡ることになる。当時の王・ヴァッタガーマニーアバヤ王(前103～77年)の碑文や口承伝承が残っている。その頃は僧侶たちが住居としていたのであろう。だとすれば、此処が伝道布教や修業・瞑想センターの役割を果たした場所だと考えられる。行をする場所は俗域から離れていた方が良く、かと言って、僧侶の食生活は托

鉢に頼るため、寺院のある聖域から歩いて行ける近隣に托鉢の場がなければならない。私の知る限りのスリランカの岩窟・石窟寺院を考察すると、比較的町並みや街道に近い場所にある。聖域と俗域の丁度よい接点が望ましい。要は俗世間と聖域の距離は、近からず遠からずでなければならない。

タランガッレ・ソーマシリ師のお話によれば、このダンブッラは、自然にできた岩窟を利用して寺院が作られたという。当地は雨季のスコールが激しいのだが、岩窟の天井から水が滴り落ちないのであろうか？ その工夫がどのようなものか専門的な知識のない私には分からない。またどのような工法でかくも見事な石窟寺院として完成させることができたのかも私の思考を越えている。

いずれにしても余程の経済的な背景がなければこれだけ立派な色彩壁画を寺院内に引きあげるのは不可能であろう。もともとは修行僧たちの修業の場である僧院だった所に、タミル人との戦いに敗れた王がここで保護され僧院を自身の住居とし、反撃のチャンスを待った場所だと言われている。不安や苛立ちをおさめる為に描かれた仏画であろうか。王は仏教信仰に厚く、また保護を受けたことへの感謝の念により自身の財産を寄進し、ダンブッラの僧院を寺院と発展させたというが、その後の気が遠くなるような年月をかけ現在の姿に完成させていったスリランカ民衆の仏心を思わずにはいられない。仏教に寄せる民衆の布施と仏への供養の賜物であろう。

### 🔥 黄金寺院・石窟寺院の5窟を拝し観て歩く

「第1窟が一番古くて、第5窟になると1915年に作られているからもっとも新しいですよ」と説明している、ツアーグループの日本語ガイドの声がした。第1窟は神様の王の寺院といわれている。2200年以上の歴史を持っている。第5窟は100年前に開窟されている



ダンブッラ石窟寺院は5窟ならんで岩山の中腹にある

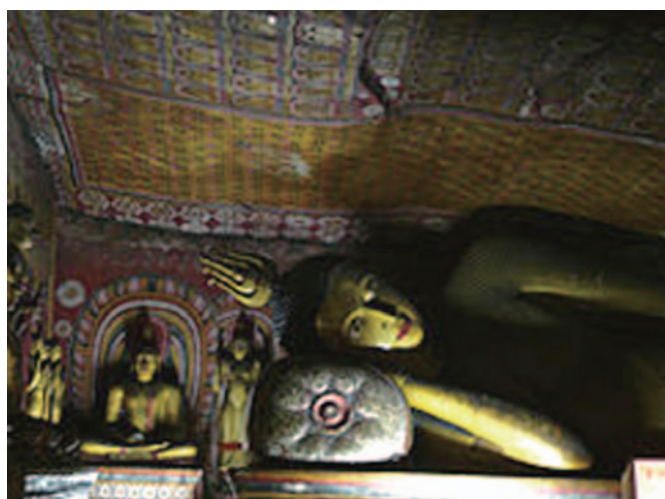
のか…。それとも塗り直されたのか？ 後で直に見てみよう。まずは第1窟に入ってみた。全長14mもある涅槃仏が横たわっている。足の裏が赤く塗られているのにびっくりした。左足と右足の親指が揃っていないのは寝仏さまの特徴なのだろうか。右側の奥には立ったままの釈尊の弟子・アーナンダ像が置かれている。赤い着衣である。天井を見上げたら一面に絵画が見れた。壁画技法は、生乾きの漆喰に水溶性の塗料を用いて画かれているのだろうか。石を砕いて染料を創るとも聞いたことがあるけれど、素人なのでわからない。時代はかなり後になって、ポロンナルワの王朝の王・ヴィジャヤパーフ1世(在位1055～1110)によって、修復され、更に同王朝のニッサンカマツラ王(在位1187～1196)によって再度修復がなされた。ニッサンカマツラ王はこの窟を「黄金山洞窟寺」と呼称し、大きな碑文を残された。そう聞けば入口の山門と第1窟との壁面にあったのは「それであったのか」と思い出しながら第2窟に行った。第2窟の横幅は約37m、奥行は23mと云う。坐像40体位、立像10数体、6mもあろうかと思われる横臥仏の他、彫刻があった。

以前は写真撮影が禁じられていたのに、今回はフラッシュ使用が可能になっている。ここでも天井を見上げたら、仏陀の説法が描かれている。スリランカ史についても所せましの如く画かれており、シンハラ人とタミル人の戦いの画面があった。そんなに古くから両民族の争いがあったのかと、つい最近まで続いていたスリランカの内戦を思い出す。中ほどに歩み寄ると、天井からぼたぼたと雫が滴り落ちて、その下に置かれた大きな壺の中に入って行く。この水は聖水で、大切な仏教儀礼の際に僧侶が飲む水だという。ダンブツラとは「水の湧き出る岩」の意味があり、当地の名の由来であるとのことである。絶えず水滴が落ちて来ては水浸しになるのでは考えてみるが甕の中の水量は不思議に減りも増えもしないそうだ。

次の第3窟はキャンディ王国時代に作られた寺院で、全長9mの寝仏や50数体の仏像があった。仏陀の人生や仏教行事に関する天井の画にうっとりした。第4窟になると多少の疲れが出てキャンディ末期の坐像群よりも仏塔の方に目が移った。ゆっくりと最後の窟に足を踏み入れると新しい感じがする。塗り直された



ダンブツラのストゥーパと釈迦坐像



ダンブツラの涅槃仏

のか、横臥仏の周囲の壁画まで、他の窟に比べて明るく見えた。1915年と云えば日本の年号は大正4年であるから、気の遠くなるような太古ではない。どの窟も参拝者でほぼ満場の感じで、この暑さの中をと思わずにはいられない。大規模な修理は18世紀のキャンディ王国が最後になっている。

タンブツラ石窟・黄金寺の入場券を買って靴を脱いで預け、黄金寺院に入り、此処でも見事なマンダラに感動した。タンブツラ黄金山・石窟寺院が内観外観の威容と世界遺産の栄光を保持し保存する大変さを痛く感じると共に、崩壊が進まないよう念じた。

■掲載写真は、「Golden Temple of Dambulla-UNESCO World Heritage Centre」

(<http://whc.unesco.org/en/list/561>) より